

韓国語における主語標示と情報構造

言語学・応用言語学専門分野

2020(令和 2)年入学

三輪 春佳

2024(令和 6)年 1 月提出

要旨

本論文では、韓国語における主語標示について、韓国語母語話者の聞き取り調査を通して分析を行った。特に無助詞による主語標示に着目し、下地(2019)により提唱された脱主題化仮説を韓国語に援用しながら分析を行い、韓国語における主語標示の実態について既存の意味用法とは異なる角度から分析する。

韓国語において、無助詞による主語標示は主題環境と非主題環境の両方に出現し、無助詞に積極的な意味は存在しない。日本語の格助詞ガに対訳される이/가(以下 **i/ga** とする)による主語標示は、主題環境では出現することができず、非主題であることを表す標識となっている。日本語の助詞ハに対訳される은/는(以下 **eun/neun** とする)による主語標示は、主題標示に使われない対比のみの用途であるため、無助詞と出現範囲が被らない。さらに、非主題環境における内在的主題性の低い主語は、特別に **i/ga** による脱主題の標示を必要としない。以上の調査結果から、韓国語において無助詞による主語標示は無標であり、主題性の高い主語が非主題である場合や、対比の場合に、必要な助詞を用いて主語標示を行っていることが結論付けることができる。

目次

1. はじめに	1
1.1. 対象とする言語と現象	1
1.2. 主語標示の形態音韻交替	2
2. 先行研究	2
2.1. 日本語と韓国語における助詞と無助詞の類似点と相違点	2
2.2. 日本語における「ハもガも使えない文」	3
2.3. 脱主題化仮説	5
2.4. 韓国語における助詞省略についての記述	6
2.5. 韓国語における無助詞に積極的な機能があるとする分析	6
2.6. 「指定主題」について	8
3. 先行研究の問題点と本研究の目的	9
4. 調査	10
4.1. 仮説	10
4.2. 調査方法	11
4.2.1. 予備調査	11
4.2.2. インタビュー調査	12
5. 調査結果	12
5.1. 述語焦点	13
5.2. 主語焦点	14
5.3. 文焦点	14
6. 結論	19
参照文献	22
グロス一覧	23

1. はじめに

本研究の目的は、韓国語において「이/가 (i/ga)」や「은/는 (eun/neun)」、もしくは無助詞で行われる主語標示について、情報構造を軸に分析することである。結論として、無助詞に積極的な機能はなく、主語が主題ではない時に、そのことを示す標示として i/ga が用いられ、主語が対比主題となっている場合には eun/neun が用いられるということを示す。

1.1. 対象とする言語と現象

一般的な韓国語の話し言葉における主語標示について調査を行う。韓国語には、日本語のガに対訳される i/ga による主語標示、そして日本語のハに対訳される eun/neun による主語標示がある。

- (1) 나는 라면을 먹었다.
na=eun ramyeon=eul meog-eot-ta
私=TOP ラーメン=ACC 食べる-EXT-PST
「私はラーメンを食べた」

- (2) 내가 라면을 먹었다.
nae=ga ramyeon=eul meog-eot-ta
私=NOM ラーメン=ACC 食べる-EXT-PST
「私がラーメンを食べた」

また、書き言葉における無助詞の容認度は高くないが、話し言葉においては無助詞による主語標示もよく見られる。

- (3) 나 라면을 먹었다
na ramyeon=eul meog-eot-ta
私 ラーメン=ACC 食べる-EXT-PST
「私 ラーメンを食べた」

以後、無助詞による主語標示には、主語の後ろに Ø を付けて表すものとする。

韓国語における主語標示は上記の三種類であり、日本語における主語標示が助詞ガ・ハと無助詞の三つによるということと似通っている。

1.2. 主語標示の形態音韻交替

i/ga について、主語の音が子音で終わる場合には i を用い、主語の音が母音で終わる場合には ga を用いる。

(4) a. 귤이

gyul=i

みかん=NOM

「みかんが」

b. 사과가

sagwa=ga

りんご=NOM

「りんごが」

eun/neun について、先ほどと同様に主語の音の子音で終わる場合には eun を、主語の音が母音で終わる場合には neun を用いる。

(5) a. 귤은

gyul=eun

みかん=TOP

「みかんは」

b. 사과는

sagwa=neun

りんご=TOP

「りんごは」

2. 先行研究

2.1. 日本語と韓国語における助詞と無助詞の類似点と相違点

韓国語の i/ga、eun/neun の使い方が日本語の主格助詞ガ、主題助詞ハの使い方と似て非なるものであることは複数の論文で発表されている。

金善美(2008)では韓国語と日本語の主題標識「eun/neun」と「は」に関する対照研究を行い、両者の共通点と相違点について述べている。

まず共通点として、日本語と韓国語の両者に新情報と旧情報のそれぞれを担う形式的な

標識が存在することが挙げられている。また、両者ともこのような標示の省略が可能である。

表 1 日本語と韓国語の共通点

	日本語	韓国語
新情報を表す標識	が	이/가 (i/ga)
旧情報を表す標識	は	은/는 (eun/neun)
標識の省略	可能	可能

次に相違点として、日本語の「は」は主題用法と対比用法の両方で使用することができるが、韓国語の「eun/neun」は主題用法での使用が厳しく制限され、対比用法での使用がほとんどであるということが挙げられている。

2.2. 日本語における「ハもガも使えない文」

日本語と韓国語の主題標示と主格標示に上記のような多数の類似点がある以上、日本語の無助詞文の分析が韓国語の無助詞文の分析に役立つ可能性が高い。日本語における無助詞は古くからさかんに議論されており、韓国語における無助詞について独自の分析を行った金智賢(2009, 2010, 2016)においても日本語における無助詞の分析が参考にされている。

日本語の標準語において主語に主題助詞ハも主格助詞ガも現れない文は尾上(1987)によって指摘され「ハもガも使えない文」と呼ばれるようになった。

尾上(1987)は、ハもガも使えない文として次のような場合を挙げている。

(i) 存在の質問文およびそれに類似のもの。

(6) はさみ \emptyset ある？

(ii) ディスココースの中で初出の主語に対し、述語で積極的に新しく説明あるいは評価を与えるもので、題目—解説関係を帯びた文の主語。

(7) この店 \emptyset 安いんだ。

(iii) 主語と後続内容との関係が助詞ガで示されるような積極的な論理関係ではなく、ハで表現されるような積極的な「題目—解説」関係でもないもの。主語が明示されていなくても内容として話し手自身のことや発話相手に対する語りかけに決まっているもの

- (8) あんた Ø 先に行って。

大谷(1995)は尾上(1987)の分類を参考に、無助詞となる場合を以下のように定めている。

- (i) 現象を認知し判断の加工を加えずにそのまま発話している現象文だが、情報の流れはその主語の名詞が文脈状主題になっていて判断文的であるとき
(ii) 判断文であるが、情報の流れとしては主語、述語いずれも現場の文脈に登場していないため全体が新情報の文であるとき

「ハもガも使えない文」を分析する上で注目されたのが、大谷(1995)でも言及されている「現象文」と「判断文」である。現象文とは、ある現象を話し手の判断を含ませずに現象をそのまま表した文（三尾 1948: 83、仁田 1991: 122）である。仁田（1991: 122）はさらに、現象文は必ず文全体が新情報であり、文中に主題を含まないとする。判断文とは、ある事項についての話し手の解説や判断を含む文（三尾 1948、仁田 1991: 116-117）である。仁田（1991）の分類を整理すると表 2 のようになる。

表 2 判断文と現象文（仁田 1991）

	判断文	現象文
話者の判断を含む	○	×
文全体が新情報	×	○
主題を含む	○	×

しかし実際には「ハもガも使えない文」の多くが表 2 に示す判断文的な特徴と現象文的な特徴を一部ずつもつハイブリッドな文であるとされている。

- (9) あっ、この時計 Ø 止まってる。(甲斐 1992: 102、大谷 1995: 290)

甲斐(1992: 102-103)は、(9)のようにダイクシスを伴う例は、たとえ初めて言語化されるとしても聞き手にとって何を指示しているか同定可能であり、主題性が高いとする。一方で出来事を描写する点で現象文的であるとし、このような例では主題助詞も主格助詞も使えないと指摘する。大谷(1995: 290)も甲斐(1992)と概ね同様に、(9)はダイクシスを伴う名詞句が主語となっている点で判断文的である一方、文全体が新情報である点で現象文的であると指摘し、このため「ハ」も「ガ」も使えないと主張する。

廣澤・松岡・下地(近刊)が指摘するように、このような判断文と現象文という軸による分析には問題点がある。それは判断文と現象文の違いの一つとされる「話者の判断を含む(か

否か)」を客観的に検証することが難しいという点である。

2.3. 脱主題化仮説

下地(2019)のように判断文や現象文という枠組みを用いずに新しい視点から無助詞を分析する研究もある。

下地(2019)は、日本語における無助詞に積極的な意味はなく、無助詞による主語標示は無標で一番基本的なものであるとしている。非主題主語のような主語が主題ではないことを特別に示す必要がある環境では助詞ガを用い、主題助詞とも呼ばれる助詞ハの使用は対比の解釈を避けるために制限があると分析しているが、このように、無助詞による主語標示を基底とし、特別に主格標示や対比標示が必要なときだけに助詞ガやハが用いられるという考えを脱主題化仮説と呼ぶ。

- (10) (「外雨降ってる？」という質問に対して)

雨 Ø 降ってるよ。

*雨が降ってるよ。

*雨は降ってるよ。

- (11) (「太郎今何してるの？」という質問に対して)

太郎 Ø お皿を洗ってるよ。

*太郎がお皿を洗ってるよ。

太郎はお皿を洗ってるよ。

- (12) (「誰がお皿を洗ってるの？」という質問に対して)

太郎がお皿を洗ってるよ。

*太郎 Ø お皿を洗ってるよ。

*太郎はお皿を洗ってるよ。

- (13) (一緒に台所にいた太郎がお皿を割り、音を聞いてやってきた母親に「何が起きたの？」と質問されて)

太郎がお皿を割ったんだよ。

*太郎 Ø お皿を割ったんだよ。

*太郎はお皿を割ったんだよ。

脱主題化仮説は、日本語における主語標示の分析のための新たな視点として日本の諸方言の分析に用いられている。

2.4. 韓国語における助詞省略についての記述

金仁炫(2006)では日本語と韓国語における格助詞（ひいては格そのもの）の省略現象について記述、考察を行っている。格助詞の省略においては次のことが述べられる。

(i) 格助詞の省略には原文の意味を保存しつつ、言語表現の簡潔性を維持しなければならないという条件がつく。

(ii) 文法の統辞的な機能のほかに、何か意味をはっきり表していない場合と日常の会話と実用的な文章の表現などで省略される助詞が多い。

2.5. 韓国語における無助詞に積極的な機能があるとする分析

金智賢(2010, 2016)は、韓国語における無助詞の意味用法について規定し、主題と絡めての考察も行い、詳しくまとめている。他の多くの研究と異なり、韓国語における無助詞が単なる省略現象ではないとしており、無助詞が積極的な意味を持つと主張しているところが特徴的である。

金智賢(2016)では、主語名詞句が無助詞を取る文に対し、「無助詞は、発話の現場に具体的・抽象的に存在するものや活性化しているものを指差すように取り上げ、それについて何かを述べる際に用いられる」と無助詞の意味用法を規定している。指示対象を活性化させる用法を「指差」と呼び、「排他」や「対比」と並ぶ談話・語用論レベル上の独立した用法であるとした。また、「指差」用法と関係が深い「現場性」については、会話の現場に具体的に実在することを含め、抽象的に存在すること、そして、会話の現場に活性化されていることを意味するものとまとめている。金智賢(2016)における用法をまとめると以下の表3のようになる。

表3 各助詞類の機能と用法（金智賢 2016）

助詞類	機能—統語・意味論レベル	用法—談話・語用論レベル	現場性
無助詞	— (格助詞の省略/非実現)	会話の現場に存在するものを指差すように取り上げ、それについて述べる「指差」用法	○
ガ・i/ga	格助詞(主格/主語標識)	対象を他のものと排他的に取り上げる「排他」用法	×
ハ・eun/neun	—	対象を他のものと対比的に取り上げる「対比」用法	×

また、金智賢(2010)では、韓国語と日本語の無助詞主題の意味を対照分析することによ

って、「主題」の概念を整理し無助詞の特徴を確認している。

主題については以下のように定義している。

「主題」とは、「主題 - 解説」(「名詞句 - 述部」)といった表現類型を持つ文形式において文頭に来る名詞句で、述部でそれについて述べるといった「ついて性」を持ち、その情報構造における性質は「既知性」である。(金智賢 2010: 96)

無助詞については以下のように述べている。

無助詞文は、その「取り出し」用法を生かし、発話の現場に具体的・抽象的に存在するものを指す名詞句が主題となり、述部でその属性を述べるような「主題 - 解説」構造を作ることが分かる。このように無助詞文が「主題 - 解説」構造で主題に用いられる場合、これを「現場主題」と呼んでいる。(金智賢 2010: 104)

「eun/neun」と「は」については以下のように述べている。

「eun/neun」と「は」の主題は、情報構造の面では無助詞の主題と変わらない。これらが無助詞の主題と異なるのは、主題となっている名詞句の指示対象が、談話・語用論レベルにおいて同類の別のものと「対比」的に捉えられている点である。

話し言葉においては所謂主題標識の役割を無助詞が担当し、「eun/neun」は対比の意味が現れる文脈で使われるように「再配置」されると考えられるのである。(金智賢 2010: 106)

「i/ga」と「が」については以下のように述べている。

「i/ga」と「が」は韓国語と日本語で主格などを表す格助詞として知られているが、談話・語用論レベルではしばしば格助詞に加わった特殊な働き(「排他」)を見せる。日本語の「が」を情報構造の面から考察した久野(1973)及び高見他(2006)では、「が」は常に新情報をマークし「総記(新情報+ガ+旧情報)」と「中立叙述(新情報+ガ+新情報)」の用法があるとしている。韓国語の「i/ga」も同じように考えることができることが認められており、「i/ga」と「が」は「新情報」をマークすることになる。ところが、韓国語の「i/ga」はこれだけではなく、無助詞と「eun/neun」で見たような「主題 - 解説」構造に現れることがある。(金智賢 2010: 107)

「i/ga」文は、無助詞文に言い換えてもそれほど不自然ではない。しかし、無助詞文の場合と比べると、これらの「i/ga」文は、「強調」「意外性」「驚き」など話し手の感情・態度が強く出ているといった違いがある。本研究では、以上のような「i/ga」がマークする主題を仮に「指定主題」と呼ぶことにする。(金智賢 2010: 108)

最後に3つのパターンにおける日韓での相違点、無助詞の意味について以下のように述べ

ている。

韓国語では、主題全体の中で無助詞や「eun/neun」が同じような割合で用いられるに対し、日本語では、主題全体の中で無助詞の割合が特に高い。また、日本語にはその他の助詞類による主題も韓国語に比べて多い。非主題の「i/ga」と「が」は「新情報」に付くものと見ることができ、日本語の「が」は全てが新情報をマークするのにに対し、韓国語の「i/ga」は主題にもつくことが確認できる。

無助詞文が表す「現場主題」は談話・語用論レベルにおいて無標の主題表現であると述べたが、表 4、5（筆者注：本論文では省略）からもこのことが確認できる。典型的な書きことばで無助詞主題が現れにくいことを考慮すれば、どちらの言語でも無助詞主題の割合は相当高いものである。頻度の面でも「無標」の主題であると言えるのである。（金智賢 2010: 109-110）

2.6. 「指定主題」について

金智英(2018)では、金智賢(2016)などの先行研究をもとに日韓の助詞の非対称性をまとめ、その違いの教育方法について論じている。

まず疑問文における 2 言語間の非対称について、以下のようにまとめている。

金智賢 (2016) では「이/가 (i/ga)」と「が」が持つ＜排他＞の意味と、「은/는 (eun/neun)」と「は」が持つ＜対比＞という意味の強弱が、疑問詞疑問文の助詞使用に影響を及ぼす可能性について指摘している。韓国語の疑問詞疑問文における「이/가 (i/ga)」は単純なく指定＞の用法で、同様の文脈に「은/는 (eun/neun)」が使用されると特殊なく対比＞の意味が前面に出ることになる。一方、日本語の場合、同様の文脈で「が」が使えないのは＜排他＞の意味が強く保たれるためであるとしている。

表 4 「i/ga」と「が」・「eun/neun」と「は」の対照

	共通	意味保持の強弱とその例	機能	
			談話	統語
「이/가 (i/ga)」	排他	→意味弱化「이것은 무엇입니까? (これが(は)何ですか)」 (一般的使用) i-geos-i mu-eos-ib-ni-kka?	新情報	主題表示 ／主格
「が」		→意味保持「これが何ですか」 ：他のものについては聞いておらず「これ」、の意	新情報	主格
「은/는 (eun/neun)」	対比	→意味保持「이것은 무엇입니까? (これ何ですか)」 i-geos-eun mu-eos-ib-ni-kka? ：特定のあれ(それ)ではなく「これ」、の意	旧情報	主題表示
「は」		→意味弱化「これは何ですか」 (一般的使用)	旧情報	

次に平叙文における非対称について、「って」という助詞により理解することについて次のように述べている。

「って」には特定の対象の属性を述べる際に使用される主題表示の機能と、新情報の導入に使用される側面の両方が備わっているように見受けられる。そのような「って」の機能は、韓国語の助詞「이/가 (i/ga)」の機能と文法的に類似しているので、その対応関係を定型化することも可能であると思われる。「が」や「は」ではない第3の選択肢として「って」を当てはめると、その意味が明確に伝わってくる。すなわち、話し手の知る既知の対象が持つ属性を、個人的な経験などで再認識しているといった印象が浮き彫りになるのである。(金智英 2018: 86)

3. 先行研究の問題点と本研究の目的

韓国語における無助詞やその他による主語標示について最も細かく論じられているのは金智賢(2016)である。韓国語における無助詞に「指差」という用法を規定し「排他」や「対比」と分けて使うことで「無助詞・eun/neun・i/ga」の使い分けを見事に説明している。しかし、以下のような2つの問題点が残る。

まず、「指差」用法というものが抽象的で幅広い概念であるため、その客観的な分析が難しいという問題点が挙げられる。「指差」の対象がその場にあってもなくても、また、情報構造上新情報であるといえるものが主語であるときにも「指差」用法を使うことができ、「指差」用法が容認可能な範囲が限りなく広がってしまうため、先行研究にあったような「話に取り上げて活性化させる」対象が具体的にはどのような属性の名詞であれば成り立つのか定義することが困難である。

(14) (買い物中店員からのおすすめで気に入ったものがなくて)
他のもの Ø ありますか。

(15) (相手の顔を見て)
あら！鼻血 Ø 出てるよ！

上記(14)は主語が発話の現場に存在しなくても「指差」用法が可能となる例、(15)は非主題主語でも「指差」用法が可能となる例である。

第二の問題点は、無助詞と主題の関係性が曖昧なままであるという点である。金智賢(2010, 2016)では、無助詞・i/ga・eun/neunのそれぞれで主題—題述構造が見られる例について言及している。無助詞の主題については、「指差」用法が適用される範囲の内側での主題—題述構造として「現場主題」と定義し、eun/neunの主題は「対比主題」と定義し、i/gaの主題は「指定主題」と定義した。しかし、同論文はこれらを定義しその意味的特徴を金

智賢(2009)が定義した「指差」用法・「排他」用法・「対比」用法を援用して述べただけであり、主題を持ち出したものの無助詞との関係性を客観的に分析した訳ではない。「指差」用法の範囲内に主題主語文と非主題主語文の両方が含まれる(上記 14,15)ということが、「指差」用法では無助詞と主題の関係性を分析できないという証拠である。また、これら3種類の主題文についての特徴を記述しているが、「i/ga」(指定主題)文と無助詞(現場主題)文の違いについて、「「i/ga」文は、無助詞文に言い換えてもそれほど不自然ではない。しかし、無助詞文の場合と比べると、これらの「i/ga」文は、「強調」「意外性」「驚き」など話し手の感情・態度が強く出ているといった違いがある。」と述べるに留まり、これも、客観的な根拠を基にした記述であるとは言えない。

上記の問題点を踏まえ、本研究では、韓国語における無助詞による主語標示、もしくは i/ga や eun/neun による主語標示がどういった環境において選好され、どういった環境においては容認されないのかについて、情報構造の観点から分析する。

まず、客観的な分析が難しい「指差」用法を始めとする、金智賢(2016)が用いたような用法による分類は行わないものとする。代わりに下地(2019)が提唱した脱主題化仮説を用い、主題や焦点といった情報構造上の観点を主軸に無助詞や i/ga による主語標示の分類について考察する。具体的には、主語が主題ではないことを特別に示す必要がある場合、つまり主語焦点の文や文焦点の文であるという条件では i/ga が選好され、そうでない場合には無助詞が選好されるという予想のもと調査を行い、無助詞と主題の関係性について分析を行っていく。

下地(2019)における脱主題化仮説は、韓国語の無助詞研究においてまだ応用されておらず、韓国語における i/ga が、「排他」の意味の弱化により日本語のガとは異なり主題文にも登場し得るという点から、日本語と全く同じような結果が得られるとは考えられない。しかし、韓国語における「指定主題」は日本語に訳すとハでもガでもない「ッテ」が用いられるほど特殊な場合であると言え、一般的な口語において無助詞文を脱主題化仮説で分析することの効果はあると考える。以上より私は、脱主題化仮説を用いた「韓国語における主語標示では、無助詞に特別な意味はなく、主語と主題が一致していないことを特別に示す必要があるときに i/ga が使用される」という仮説が正しいか検証する。

4. 調査

4.1. 仮説

調査では、韓国語の主語標示においても脱主題化仮説が通用すると予想し、脱主題化仮説による以下の指摘に韓国語が合致しているかどうかを調べる。

(I) 無助詞は主題環境・非主題環境のどちらにも出現するため、無助詞に積極的な意味はない

- (Ⅱ) i/ga は主題環境に出現することができないため、主題ではないことを示す
 (Ⅲ) 主題ではないことが明確な主語（非主題環境における内在的主題性の低い主語）は、主格標示（＝脱主題化）が不要である

また、無助詞・i/ga・eun/neun のそれぞれが選好される条件を表にまとめると以下の通りになる。

表 5 各主語標示の選好条件

無助詞	述語焦点の文 / 文焦点の文(名詞句階層の低い主語・動作主性の低い動詞)
i/ga	主語焦点の文 / 文焦点の文(名詞句階層の高い主語・動作主性の高い動詞)
eun/neun	対比主題の文

4.2. 調査方法

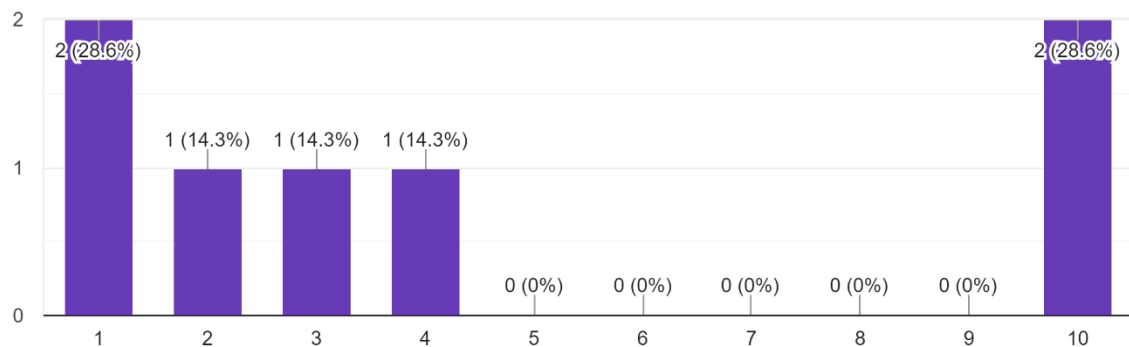
韓国語母語話者を対象に、予備調査として google forms によるアンケート調査を行い 7 名からの回答を得たほか、本調査として話者 3 人に対するインタビュー調査を行った。予備調査では前項の仮説の正確さをおおまかに把握し、それを基に本調査ではより細かな条件設定をした調査票を用いて、文の特性別に各種主語標示の容認度について調査した。

4.2.1. 予備調査

質問内容は会話の文脈において文焦点、主語焦点、述語焦点のそれぞれの応答が必要とされる質問文を用意し、「無助詞、i/ga、eun/neun」による応答文の容認度を 10 段階で調べるといったものだった。10 代から 20 代の韓国語母語話者 7 名からの回答を得た。調査の結果、主語焦点の文では、i/ga の容認度が高く無助詞と eun/neun の容認度は極めて低いこと、述語焦点の文では、無助詞>eun/neun の順に容認度が高く i/ga の容認度が極めて低いこと、文焦点の文では、i/ga>無助詞の順に容認度が高く eun/neun の容認度が極めて低いということが分かった。

主語焦点の文や述語焦点の文に関しては予想していた通りの明解な結果を得ることができたが、文焦点の文に関しては得られた値にばらつきが見られた設問もあり、更なる調査が必要となった。以下図 1 は予備調査において得られた値にばらつきが見られた設問の回答分布である。容認可能である 10 を付けた人と容認不可能である 1 を付けた人が二人ずついる結果となった。

図 1 (「何があったの」という質問に対して)「お皿 Ø 割れた」という応答文の容認度
(1 が容認不可能、10 が容認可能)



4.2.2. インタビュー調査

予備調査と同じ構造の質問を、例文の設定や背景を明確に説明しながら行い、主語標示の各種における容認度を調査した。話者はいずれも 20 代の女性で、江原道出身が 1 名、慶尚南道出身が 2 名だった。特に、文焦点の応答文における無助詞と *i/ga* の使い分けについて詳しく分析を行うために、例文を主語の名詞句階層での位置や述語動詞の動作主性の高さで区分して設定し、無助詞での回答や *i/ga* での回答の分布を調査した。例文の区分は以下の表 6 の通りである。なお、表に記載されている番号は後述する例文の番号である。

表 6 名詞句階層や動作主性の高さによる例文区分

	代名詞	有生	無生
A(他動詞主語)	(18)	(19)	(20)
S _A (動作主的自動詞主語)	(21)	(22)	(23)
S _P (対象的自動詞主語)	(24)	(25)	(26)

5. 調査結果

本調査における、無助詞・*i/ga*・*eun/neun* の各種が異なる焦点の文において容認されるかの調査結果を表 7 にまとめた。

表 7 インタビュー調査における各応答文の容認度

	Ø (無助詞)	<i>i/ga</i> (가)	<i>eun/neun</i> (은/는)
述語焦点	○	×	△
主語焦点	×	○	×
文焦点	△	○	×

- ：使用が容認可能である
 △：条件によっては例外的に使用が容認可能である
 ×：使用が容認不可能である

この結果から、まず無助詞が述語焦点と文焦点の文で容認可能であるといえる。無助詞は主題/非主題に関わらず使用が可能であり、これは無助詞が積極的な意味を持たないという脱主題化仮説の指摘に合致する。また、無助詞は文焦点の環境において使用することができるが、これは、主語の名詞句階層や述語動詞の動作主性の高さにより制限がある。

次に、i/ga が、主語が主題である述語焦点の環境に使用できないことは、i/ga が非主題主語を示すマーカであることと表しており、これは脱主題化仮説の指摘に合致する。また、i/ga と eun/neun は表において相補分布しており、助詞による主語標示は主題主語か非主題主語かにより完全に使い分けがされていることが分かる。

次節より、焦点範囲ごとに分けて各主語標示の容認度を例文とともに解説する。

5.1. 述語焦点

述語焦点の応答文においては無助詞による主語標示が最も容認度が高く、話者の第一回答となる。反対に i/ga の応答文は容認されない。また、eun/neun は会話に対比のニュアンスを表す場合にのみ容認できる。

(16) 電話で相手から「今何をしているの?」と聞かれて

a. 나 지금 술을 먹어.

na jigeum sul=eul meog-eo

私 今 酒=ACC 飲む-PRS

「私 Ø 今 お酒を 飲んでいるよ。」 (最も自然)

b. *내가 지금 술을 먹어.

nae=ga jigeum sul=eul meog-eo

私=NOM 今 酒=ACC 飲む-PRS

「*私が 今 お酒を 飲んでいるよ。」 (容認できない)

c. 나는 지금 술을 먹어.

na=neun jigeum sul=eul meog-eo

私=TOP 今 酒=ACC 飲む-PRS

「私は 今 お酒を 飲んでいるよ。」 (あなたはどうかなのかという聞き返しがつくと自然)

5.2. 主語焦点

主語焦点の応答文においては *i/ga* のみが容認可能で、無助詞と *eun/neun* は容認不可能である。

(17) 誰が泣いているの? という質問に対して

- a. *유나 울어.
yuna ul-eo
ユナ 泣く -PRS
「*ユナ Ø 泣いているよ。」
- b. 유나가 울어.
yuna=ga ul-eo
ユナ=NOM 泣く -PRS
「ユナが 泣いているよ。」
- c. *유나는 울어.
yuna=neun ul-eo
ユナ=TOP 泣く -PRS
「*ユナは 泣いているよ。」

5.3. 文焦点

文焦点の応答文においては、*i/ga* による主語標示が最も容認度が高く、第一回答である。無助詞は主語の名詞句階層や述語動詞の動作主性の高さによって容認度が変わり、名詞句階層が低い主語や、動作主性が低い動詞の場合には *i/ga* による主語標示より選好される場合もある。*eun/neun* は容認されない。以下、表のような九つの場合において例文を用いて容認度を調べた結果を述べる。

表 6 (再掲) 名詞句階層や動作主性の高さによる例文区分

	代名詞	有生	無生
A(他動詞主語)	(18)	(19)	(20)
S _A (動作主的自動詞主語)	(21)	(22)	(23)
S _P (対象的自動詞主語)	(24)	(25)	(26)

質問内容は、「おい! (主語 a)+(述語 b)」というテンプレートに合わせて自分が見た光景を相手に即座に伝えなければならないとき、a と b の間には *i/ga* が必要か必要ではないかというものである。なお、述語動詞は原形を提示し、自由に活用させてよいものとした。

(18) a. 저 사람

jeo=saram

あの=人

「あの人」

b. 창문을 깨뜨리다

changmun=eul ggaeddeurida

窓=ACC

割る

「窓を割る」

→i/ga を選好

(19) a. 아이

ai

子ども

「子ども」

b. 창문을 깨뜨리다

changmun=eul ggaeddeurida

窓=ACC

割る

「窓を割る」

→i/ga を選好

(20) a. 바위

bawi

岩

「岩」

b. 차를 부수다

cha=reul busuda

車=ACC

潰す

「車を潰す」

→i/ga を選好

(21) a. 준호

junho

ジュノ

「ジュノ(人名)」

b. 울다

ulda

泣く

「泣く」

→無助詞を選好

(22) a. 직원분

jigwonbun

店員さん

「店員さん」

b. 일어나다

ileonada

立ち上がる

「立ち上がる」

→無助詞を選好

(23) a. 코피

kopi

鼻血

「鼻血」

b. 흐르다

heureuda

流れる

「流れる」

→無助詞を選好

(24) a. 저 사람

jeo=saram

あの=人

「あの人」

- b. 쓰러지다
sseureojida
倒れる
「倒れる」

→無助詞を選好

- (25) a. 아이
ai
子ども
「子ども」

- b. 쓰러지다
sseureojida
倒れる
「倒れる」

→無助詞を選好

- (26) a. 바위
bawi
岩
「岩」

- b. 부서지다
buseojida
砕ける
「砕ける」

→無助詞を選好

調査では、他動詞主語の場合は全て i/ga を選好(上記 18,19,20)、対象的自動詞主語の場合は全て無助詞を選好(上記 24,25,26)、また、動作主的自動詞主語の場合は上記に例示をしていないが、i/ga、無助詞のどちらを選好する結果も出た。動作主的自動詞主語の環境では主語の名詞句階層に関係なく「走る」、「さまよう」といった比較的動作主性の高そうな動詞において i/ga が選好された。

- (27) a. 아이
ai
子ども
「子ども」
- b. 헤매다
hemaeda
さまよう
「さまよう」
- i/ga を選好

- (28) a. 기린
girin
キリン
「キリン」
- b. 뛰다
ddwida
走る
「走る」
- i/ga を選好

このことから、主題性が高い特に他動詞主語のような環境では、主語が主題ではないときに i/ga のようなマーカーの必要性が高まり、主題性が低い対象的自動詞主語のような環境では、非主題主語のマーカーの必要性が低くなるため、無助詞の選好度が高くなると説明することができ、「主題ではないことが明確な主語（非主題環境における内在的主題性の低い主語）は、主格標示（＝脱主題化）が不要である」という脱主題化仮説の指摘に合致する。

表 8 主語の主題性の高さによる文焦点文環境での無助詞と i/ga の選好分布

	代名詞	有生	無生
A(他動詞主語)	i/ga	i/ga	i/ga
S _A (動作主的自動詞主語)	i/ga もしくは Ø	i/ga もしくは Ø	i/ga もしくは Ø
S _P (対象的自動詞主語)	Ø	Ø	Ø

6. 結論

調査結果をもとに、韓国語の主語標示が第4章で言及された脱主題化仮説の指摘に合致しているか検証する。以下、検証する指摘を再掲する。

- (I) 無助詞は主題環境・非主題環境のどちらにも出現するため、無助詞に積極的な意味はない
- (II) i/ga は主題環境に出現することができないため、主題ではないことを示す
- (III) 主題ではないことが明確な主語（非主題環境における内在的主題性の低い主語）は、主格標示（＝脱主題化）が不要である

第一に指摘(I)を検証する。5.1、5.3 より、無助詞は述語焦点の文と文焦点の文で使用可能であることが示されている。述語焦点の文は主題環境、文焦点の文は非主題環境であるため、その両方に無助詞が出現可能であるということは、「無助詞は主題環境・非主題環境のどちらにも出現するため、無助詞に積極的な意味はない」という脱主題化仮説の指摘に合致する。

第二に指摘(II)を検証する。5.1 より、i/ga が述語焦点の文では使用できないことが示されている。述語焦点の文は主題環境であるため、その環境で i/ga が出現できないということは、「i/ga は主題環境に出現することができないため、主題ではないことを示す」という脱主題化仮説の指摘に合致する。

第三に指摘(III)を検証する。5.3 より、文焦点文の環境において主語の主題性が高い場合は i/ga が選好され、主語の主題性が低い場合は無助詞が選好されるということが示されている。言い換えると主語の主題性が低いときに i/ga による主格標示を必要としていないということであり、これは「主題ではないことが明確な主語（非主題環境における内在的主題性の低い主語）は、主格標示（＝脱主題化）が不要である」という脱主題化仮説の指摘に合致する。

また、脱主題化仮説には「主題標示は、主題環境に限定され、かつ主題であることが明らかな場合には義務的ではない」という指摘がある。日本語においては助詞ハが主題標示と対比の二役を果たしているため、主題標示を行う無助詞と出現範囲が被るためである。韓国語においては、5.1 でも示されているように、主題環境に出現する eun/neun の「対比」以外での使用は極めて容認度が低く、一般的な主題標示に使用することができない。そのため、無助詞と eun/neun の出現範囲が被っているとは言えず、前述の指摘を考慮に入れずとも脱主題化仮説の指摘に合致していると言える。

以上より、今回の調査結果は脱主題化仮説の指摘に合致しており、韓国語の主語標示を脱主題化仮説により分析することは有効であると結論付けることができる。

以下に、本研究の結果見えてきた今後の課題を述べる。今回の調査では肯定文の分析を中心的に行ったが、疑問文における主語標示と情報構造の関係性を分析することはできなかった。ので、引き続き研究する必要がある。

予備調査において、「他のもの {Ø/は/が} ありますか。」という疑問文における各主語標示の容認度を調査したが、無助詞・i/ga・eun/neun のいずれも高く、アンケート結果からは違いが分析できないという結果になった。

図2 「다른 거 있어요? (他のもの Ø ありますか。)」の容認度

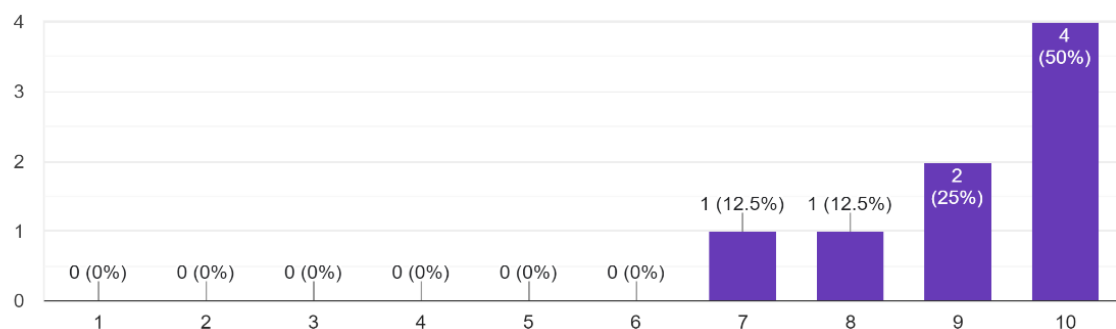


図3 「다른 게 있어요? (他のものがありますか。)」の容認度

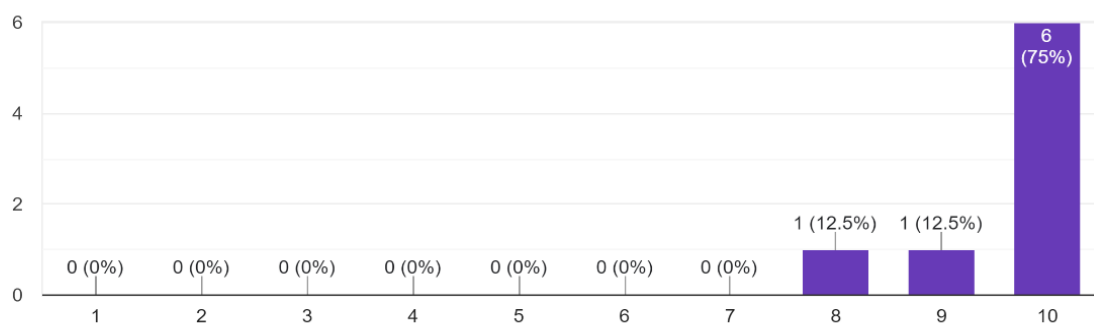
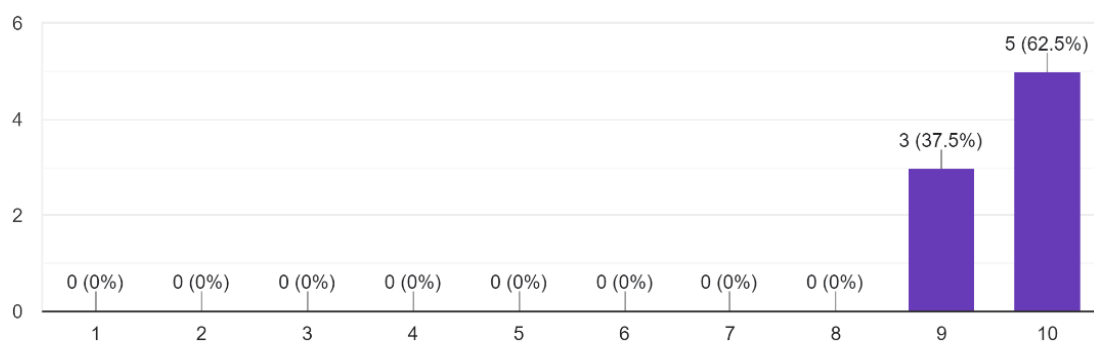


図4 「다른 건 있어요? (他のものはありますか。)」の容認度



対面調査で状況などを細かく調査すると、主語標示の方法ごとに容認度や言葉のニュアンスが異なることがわかった。容認度は無助詞＞＝eun/neun＞＞i/gaの順で差があった。話者の方の内省によると、「無助詞は最も基本的な聞き方であり容認度が高く、eun/neunは何か対比する対象があるときに容認度が高くなり、i/gaは自分の話を聞いてもらえなかったなどして相手を責める口調にするときには使うことができる」とのことだった。また、i/gaの使用に関して、特に疑問文におけるi/gaの使用の容認度には地域差が存在する可能性が浮上した。本研究でインタビュー調査を行った話者は、江原道出身話者が1名と慶尚南道出身話者が2名だったのだが、江原道出身話者はi/gaの使用に関して比較的寛容であるのに対し、慶尚南道出身話者はi/gaの使用に比較的厳しい様子が見られた。

疑問文における主語標示と情報構造の関係性を分析するために、主語などの設定を細かく行い再調査を行うとともに、出身地域により調査結果に差が生じる可能性も視野に入れ、出身地域ごとに分けて調査を行っていきたい。

参考文献

- 大谷博美（1995）「ハとガと ø」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）』：287-295. 東京：くろしお出版.
- 尾上圭介（1987）「主語に「は」も「が」も使えない文について」『国語学』150: 48.
- 甲斐ますみ（1992）「話者が「は」「が」なし文を発するとき」『関西言語学会予稿集』12: 99-108.
- 金善美（2008）「韓国語と日本語の主題標識—「은/는」と「は」に関する対照研究」『言語文化』：10-4: 665-689.
- 金仁炫（2006）「韓日両言語における主格助詞の省略類型」『日本文化研究』17: 331-348.
- 金智英（2018）「日本語母語話者における「은 / 는 (eun/neun)」と「이 / 가 (i/ga)」の習得—文法的根拠に基づいた体系的な学習のために—」『立命館高等教育研究』18: 79-92.
- 金智賢（2010）「無助詞及び「은/는」「は」、「이/가」「が」と主題について」『日語日文學研究』72: 89-113.
- 金智賢（2016）『日韓対照研究によるハとガと無助詞』東京：ひつじ書房.
- 下地理則（2019）「現代日本語共通語（口語）における主語の格標示と分裂自動詞性」竹内史郎・下地理則（編）『日本語の格表現』：1-36. 東京：くろしお出版.
- 仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房.
- 廣澤尚之・松岡葵・下地理則(近刊)「方言変異からみる「ハもガも使えない文」—宮崎椎葉尾前方言，鹿児島串木野方言，標準語の対照を通して」『日琉諸語における情報構造と文法現象』ページ数未定，東京：ひつじ書房.
- 三尾砂（1948）『国語法文章論』三省堂.

グロス一覧

-	接辞境界
=	単語境界
ACC	対格
EXT	語幹拡張子
NOM	主格
PRS	現在
PST	過去
TOP	主題

韓国語母音一覧

a	ㅏ
ya	ㅑ
eo	ㅓ
yeo	ㅕ
o	ㅗ
yo	ㅛ
u	ㅜ
yu	ㅠ
eu	ㅡ
i	ㅣ
e	ㅚ
ye	ㅜㅔ
ae	ㅐ
yae	ㅑㅔ
wa	ㅘ
wae	ㅙ
oe	ㅚ
we	ㅞ
wo	ㅟ
wi	ㅢ
ui	ㅟ

韓国語子音一覧

g ㄱ

n ㄴ

d ㄷ

r ㄹ

m ㅁ

b ㅂ

s ㅅ

j ㅈ

ch ㅊ

t ㅌ

k ㅋ

p ㅍ

h ㅎ

無音 ㅇ